

✿ 発掘調査の概要

石神遺跡 17 次調査（飛鳥藤原第 134 次）

「これ、なんやろ。」

「じょうごじゃないか。」

石神遺跡は、飛鳥資料館に展示されている須弥山石、石人像（共に重要文化財）が出土した遺跡です。これらは噴水施設に関連すると推定されています。

日本書紀には蝦夷^{えみし}、肅慎^{みしほせ}、隼人^{はやと}といった律令国家周辺の人々を迎えて飛鳥寺の西、あるいは甘樫丘の東の川上に須弥山を造り、饗宴をおこなったとあり、石神遺跡はこの饗宴施設であったと考えています。

1981 年以來、当研究所が継続的に調査を続けており、今回 17 回目を迎えました。調査区は遺跡の北側、昨年、一昨年の調査地点の東側にあたります。

石神遺跡といえば、掘立柱建物、石組みの溝や池、石敷きといった遺構が複雑に重なりあった状態で現われ、調査員の頭を悩ませることが多い遺跡ですが、2001 年の調査で中心施設の北限となる塀と溝が調査され、その北側は遺構が少なくなることが明らかになりつつあります。今回は、遺跡北側に想定される阿倍山田道との間がどのような状況であったのか検討をおこなうべく、調査を開始しました。

4 月から調査に入り、藤原宮の時期、飛鳥時代へと古い時代の遺構の調査へと進んでいきます。猛暑の中、遺構の確認作業を繰り返しました。

結果、今までの所見と同様に、飛鳥時代の遺構は少なく、調査区周辺は空間地であったようです。

何もない、とがっかりしましたが、今回はこの部分を利用して、下層へと調査を進めました。

というのは昨年、一昨年の調査でこの周辺が沼のように水が溜まっていた状態であったことが明らかとなり、その性格を検討する必要があったのです。

調査区東側では礫が集中している部分があり、掘り進んだ結果、ここが東側の岸にあたることが明らかになりました。岸は急な傾斜を持っており、沼と考えられていたものはかつての飛鳥川に流れ込む支流が作り出した谷であったようです。平坦に見える遺跡周辺は、かつては今とは異なり、起伏のある地形だったのです。岸は調査区の中央で二又に分かれており、丁度谷の合流点を調査したことになります。

出土遺物によって古墳時代中期頃から埋没が始まり、飛鳥時代の初頭に最終的に整地がおこなわれていることが明らかになりました。

飛鳥時代の整地土からは冒頭のやりとりで話題となっている漏斗形の土器をはじめ、大型の須恵器の蓋、ガラス小玉の鑄型や轆^{ろく}の羽口といった通常の遺跡では出てこないような遺物が出土しており、調査区周辺の遺跡の性格の一端を示しています。

「なんやろな、これ。」

名案があれば是非御一報を。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 金田明大）



発掘された飛鳥時代以前の谷（南東から）



出土土器・土製品 漏斗形土器は上の 2 点